

論文：

発達障害児の母親と共に創る子育てコミュニティの創造 ～ペアレントメンター養成にかかわる実践をもとに～

藤田久美
Kumi Fujita

Creating a Parenting Community Together with Mother to nurture the developmental disabilities ～ Based on practice regarding parenting mentor training ～

本研究は、ペアレントメンター活動が活動者にもたらす意味を再考し、ペアレントメンターとして活動する発達障害児を育てる母親の支援及び成長発達にかかわる支援者の役割を考察した。ペアレントメンター養成に携わった筆者の実践と省察をもとに探求した結果、ペアレントメンターにとっての意義を明らかにし、本邦の発達障害者支援施策としてすすめられているペアレントメンター養成事業のあり方への提案を行うことができた。専門家の役割として、①人材の発掘②ペアレントメンターへの継続的サポート③ペアレントメンター同士の関係を構築すること、を挙げた。共生社会における子育てコミュニティを構築するためには、当事者の代弁者となる母親が社会に積極的ににかかわるシステムが必要である。ペアレントメンターが生き生きと活動できる場を創造していくことで、インクルーシブな視点を包含した子育てコミュニティを創造することができると考える。

I はじめに

本邦の障害児者福祉政策においては、「発達障害者支援体制整備事業」（厚生労働省）が具体的にすすめられているが、近年、発達障害児者の家族も支援に参画できる取組が図られている。その取組の一つとして、ペアレントメンター養成が挙げられる。厚生労働省によると、ペアレントメンターは「発達障害者の子育て経験のある親であって、その経験を活かし、子どもが発達障害の診断を受けて間もない親などに対して相談や助言を行う人」と記してある。井上らによるとペアレントメンターを導入した家族支援はピアサポートの要素を包含し、発達障害支援における家族支援の質を向上させると報告されている（井上、吉川、日誌、加藤2015、井上、小倉、原口、加藤2015）。

筆者は、2013年（平成25年）度に、山口県障害支援課が山口県発達障害者支援センターに事業委託された「山口県ペアレントメンター養成事業」「山口県発達障害児（者）家族支援協議会」に携わり、実践と研究を進めている。例えば、早期支援の場である児童発達支援センターへのペアレントメンターを

導入したグループ活動を中心とした家族支援プログラムの開発（藤田、岡村、吉富、2015）や、山口県発達障害者支援センターの家族支援事業におけるペアレントメンターを導入したモデルプログラムの開発・実践である。ペアレントメンターを導入した家族支援事業では、親同士の支え合いの関係が構築されることや相談者である参加者の満足度も高く、家族支援サービスの質が向上する等の効果が確認できた。一方、ペアレントメンターとして活動を行った母親からは「悩んでいる自分が相談にのれているのか」「うまく助言してあげられない」という戸惑いの声が挙げられている（藤田、2017）。

筆者はこのような実践と研究を通して、ペアレントメンターとして活動する母親が、単に、家族支援を担う人材として扱われるのではなく、母親の主体的な行動を支えながら、活動者にとってプラスになる支援が必要ではないか考えるようになった。発達障害児を育てる母親が、子育ての経験を生かしながら地域社会とかわかるといふ活動が母親の人生や子育てにどのような意味をもたらすのか、という問いが生まれたのである。母親が一人の人間として尊重

され、生涯発達のプロセスを辿る過程で、どのような支援ができるのだろうか。

II 研究の視点及び目的と方法

本研究は、ペアレントメンター活動が活動者にもたらす意味を再考し、ペアレントメンター活動の実践と省察をもとに活動者の成長発達にかかわる支援者の役割を考察する。実践と省察は常に同時にあり、その積み重ねから生成される理論（考察）に意味があると考えられる。山崎（2010）は実践研究を纏めるにあたって、実践の省察の必要性を述べ、共有を図ることの大切さを説いている。また、長崎（2013）は、臨床発達心理士の実践研究の目的として、①実践方法の共有、②実践の相対日比・自己評価、③人間探求、発達の新たな理解に向けて、の3つの観点を示し、実践研究には多様性があり、実践研究に必要なものとして、①再現可能性②反省性の2つの要因を挙げている。

研究方法として、筆者が携わってきた山口県発達障害者支援センターの家族支援事業「ママグループカウンセリング」に参画しているペアレントメンター2名を対象として実践の場の様子をエピソードとして描きながら考察した。鯨岡（2005）は、「臨床の場の体験を言語化することの意義を提唱し現場は多様な『人の生の実相』が体験される場であり、その体験の中に描き出さずにはすまないものが含まれる」と説く。筆者の体験を通して「ペアレントメンターにもたらす意味」を再考し、活動の意義を明確にしたい。さらに、発達障害児の母親と共に活動する体験を通して、支援者と発達障害児の母親（当事者）が共に創る子育てコミュニティの創造の可能

性を探りたいと考える。

なお、研究を進める上で、個人情報保護、研究協力機関及び研究協力者への承諾の手続きを行った。

III 結果

1、ペアレントメンター養成事業における筆者の立場

山口県発達障害者支援センターまっぷ（以下；センター）では、平成14年度より、家族支援事業として、グループカウンセリング（事業名：ママグループカウンセリング；年12回）を15年間継続し、これまで延べ1000名以上の母親が参加してきた（平成29年3月時点）。筆者は、このこの事業の企画から携わり、運営に携わる一員として参画してきた。表1は、センター主催の平成×年の家族支援事業（ママグループカウンセリング）の概要とペアレントメンターの参加方法を整理したものである。

2 ペアレントメンター活動者にとっての意義の探求

① メンターAさんのエピソードから

<背景>

メンターAさん（40代、メンター歴3年）は、自閉症スペクトラム障害の男児（全日制高校在籍）を育てる母親である。Aさんは、子どもが小学校低学年の時からセンターのグループカウンセリングに定期的に通い、障害の特性、学校との関係、友人関係、中学・高校進学時の悩みを参加者同士で共有してきた。継続的な参加を通して、仲間を得て、子育てを

表1：山口県発達障害者支援センター母親支援事業「ママグループカウンセリング」プログラムとメンターの参加方法

日にち	テーマ	メンターの参加方法と役割	専門家の役割
4月×日	新学期を迎えて	ペアレントメンター養成に係る研修。メンバーとして参加。	運営(センター職員) ファシリテーター(臨床発達心理士)
5月×日	支援者との関係づくり	ペアレントメンター養成に係る研修。メンバーとして参加。	運営(センター職員) ファシリテーター(臨床発達心理士)
6月×日	ペアレント・メンターによる相談会 (子育てのコツ)	グループ活動の運営に加わり、メンターとしての役割を担う。	運営(センター職員) 全体のファシリテーター(臨床発達心理士)
7月×日	就学・進学について	ペアレントメンター養成に係る研修。メンバーとして参加。	運営(センター職員) ファシリテーター(臨床発達心理士)
9月×日	ペアレント・メンターによる相談会 (就学・進学について)	グループ活動の運営に加わり、メンターとしての役割を担う。	運営(センター職員) 全体のファシリテーター(臨床発達心理士)
10月×日	思春期と発達障害	ペアレントメンター養成に係る研修。メンバーとして参加。	運営(センター職員) ファシリテーター(臨床発達心理士)
11月×日	将来に向けての準備	ペアレントメンター養成に係る研修。メンバーとして参加。	運営(センター職員) ファシリテーター(臨床発達心理士)
12月×日	きょうだい児について	ペアレントメンター養成に係る研修。メンバーとして参加。	運営(センター職員) ファシリテーター(臨床発達心理士)
1月×日	ペアレント・メンターによる相談会	グループ活動の運営に加わり、メンターとしての役割を担う。	運営(センター職員) 全体のファシリテーター(臨床発達心理士)
2月×日	ペアレント・メンターによる相談会	グループ活動の運営に加わり、メンターとしての役割を担う。	運営(センター職員) 全体のファシリテーター(臨床発達心理士)
3月×日	交流会(1年間を振り返って)	ペアレントメンター養成に係る研修。メンバーとして参加。	運営(センター職員) ファシリテーター(臨床発達心理士)

行っていく上で、同じ境遇の人と話をすることの大切さを実感されている。筆者とは、グループカウンセリングでの支援の他、進学等の際に、個別カウンセリングを継続して支援してきた。Aさんは、発達障害について学びたいという意欲も持っており、専門機関が実施する発達障害に関する研修会などにも積極的に参加している。平成25年度より山口県ペアレントメンター事業が開始された時、センターから推薦を受け「山口県ペアレントメンター」として登録し、活動を行っている。

<Aさんの活動場面の参与観察から>

○活動場面と流れ

平成×年9月×日

8名の参加者が、「就学・進学についての相談をしたい」という主訴で参加した日だった。ペアレントメンター（以下メンター）として役割を担った母親は4名で、2つのグループにメンター2名が入り、一人が進行役を担った。グループには、支援者（筆者）、センター相談員が1人ずつ入り、ペアレントメンターの進行を見守りながら、適時支援を行えるようにした。Aさんは、グループの進行役を担った。自己紹介では、自分の子どもの障害に気づき、診断があってから今日までのことを簡単に伝えられ、「今も悩んでいるんですが、これまでいろいろ大変な経験をしてきたので、なんでも聴いてください」と明るい声で参加者に伝えた。グループのメンバーになった人の自己紹介と「今日相談したい事」について話してもらうようお願いした。参加者からそれぞれ「就学・進学に関する悩み」を聴きながら、一つひとつの「悩み」や「質問」に対して、経験から得た情報を提供したり、グループカウンセリングで得た情報を丁寧に伝えたりしていた。

<エピソード①>

相談者から、「教員との関係」に悩んでいる発信があった。Aさんは、相談者の話に耳を傾けながら、質問をし、相談者の気持ちを聴く姿勢を保持した。相談者からは、教員との関係の中で、揺れる母の思いや、わが子の障害の特性や発達のアンバランスさを教員と共有できないと感じるもどかしさや嘆きが、まっすぐな言葉で語られていた。その言葉には「教員に対する不信任感」を語るものもあったが、Aさんは「すぐわかります。私もそういう先生にあったことがあります、つらいですね。」と相談者のマイナスな感情をすべて受け容れ、自分の体験と重ね合わせ共感した。他のメンバーにも同じような体験がないか尋ねると、母親らは、次々に、気持ちをはきだした。「そうだね」「私の場合も・・・」といったように溢れる言葉を口にしていた。その

場にいた私は、ただ見守ることに集中していた。そして、子どもに直接かかわる教員に子どもの理解をしてもえないというもどかしい気持ちをもつ母親らの生の声を胸に響かせた。Aさんは、教員や支援者との関係づくりのため、たくさんの苦労と努力を積み重ねられた人である。だからこそ、その胸に響くものは、私とは比べられないものであっただろう。怒りや悲しみを誰かにぶつけたい時、聴いてくれる人がいたら、その重みは少しでも軽くなるだろう。子どもと共に生きる母親の壮絶な子育ての現状を私たちはこれまで肌で感じてきたのだろうか。Aさんと参加者の様子を見ながら、母親同士の語り合いの場における苦しみや悲しみの<分かち合い>を体感し、このような場面を生み出すことが私の役割ではなかと考えた。

<エピソード②>

さらに、Aさんは、相談者の日々の子育ての状況を聴き、「～さんは、頑張っていると思うよ。すごいと思います。」と伝えられた。その言葉を聴き、相談していた母親の目から涙が溢れた。相談者は、壮絶な日々の子育てに日々向かい合い、気の休まる暇もなく、母親として奮闘しているだろう。その涙は、悲しい涙というよりも、目の前のAさんの言葉にエンパワメントされた涙であり、子育てをがんばっている自分を認めてくれる人がいるといった喜びの涙であったようにも思えた。

<活動後のAさんの語りから>

Aさんは、グループ活動の事後ミーティングの時、「進行することは難しいと思ったけれど、思った以上にみなさんが話してくれたのでやりやすかった」と感想を述べた。また、「その人それぞれの悩みをすぐに解決することができないのがもどかしいが、話すことができただけでもよかったのではないかと語り、「自分もそうだったから」と付け加えた。参加者の感想を読んだ時、「何の役にも立てないのではないかと思ったが、よかったと書いてくれて嬉しい」とあった。また、その感想を読みながら、また参加者の子育てや置かれている環境について、「お母さんががんばりすぎているから、肩の力を抜いてあげたい」「昔の私と同じ状況で、気持ちがすぐわかるので、胸がいっぱいになった」と語る姿があった。進学の相談では、「あの頃の私がつらいことを思い出したけど、あの頃があったから、今があるのだと思えるきっかけを作ってくれたよう」と語った。

Aさんは、「メンターの活動が自分にとって癒しになっている」と語る。その理由として、「メンター養成がはじまって、研修や実践活動で、メンター同

士の交流ができた。その出会いは私にとって財産であるし、仲間と一緒に活動できることが嬉しい、メンターの活動は、日々の子育てから少し解放された気分を味わえることと、来られた方の『ありがとうございます』『今日来て良かったです』の言葉がとてもうれしい」とあった。Aさんは、メンターの活動を通して自分が成長していたと感じていた。「子育てをがんばっている人に出会って、すごいな、素敵だな、がんばってほしいなと思える私がいる。今も悩みながらですが、この活動を通して、自分も子育てがんばろうという元気がもらえます」とあった。

Aさんは、いつも出会った人を励まし、労うことのできる人である。Aさん自身が、子どもの障害に気づき、受診、診断後、相談活動の場に出向き、支援者や仲間との出会いを通して、多くの困難や葛藤を乗り越える知恵を生み出してこられてきたからだろう。そして、先の不安もあるが、子どもに向き合いながら、自分も親として成長しようという心を持っているように思う。Aさんの実践は、私たち専門家にできない支援の要素が含まれることを教えてくれる。私は、Aさんとの出会いの意味をかみしめながら、この活動を行うことでAさんの人生がより豊かで幸せなものになるように心から願った。

② Bさんのエピソードから

<背景>

メンターBさん（50代、メンター歴3年）は、知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害の男児（特別支援学校出身、現在は生活介護利用）の母親である。Bさんは、筆者とは、大学研究室と親の会の共同運営による子育てサロン活動の実践において、そこに参加する母親の話を聴いたり、相談にのったり、情報提供等の活動を約10年間継続している。一方、子育てでは、小学校は特別支援学級、中学からは特別支援学校に入学し、進学・就学等のライフイベント時や、日々の子育てにおいて自閉症の障害の特性、学校との関係、家族関係等、Bさん自身も常に悩みを持っていた。それらについては、共に活動している自閉症の子どもを育てる親や筆者、そしてセンターの相談を受けてきた。Bさんは、「自分の経験を生かし、反省や実践してきたことを悩んでいる人に役立てたい」という思いをもちながら活動してきた。山口県ペアレントメンター養成事業の開始に伴い、筆者からBさんにペアレントメンターの活動をしてもらいたいと伝え、センターから推薦を受け、山口県ペアレントメンターとして登録した。Bさんは、長年のボランティア活動の経験を通して、自分の人生で一番つらかった時期を「診断を受けた時」とし、その時期の前後にある母親たちの支援をした

いという願いをもっている。その思いを繋げ、山口県ペアレントメンターとして、センター主催事業や子育てサロン活動にて活動を行っている。

<Bさんの活動場面の参与観察から>

○活動場面と流れ

平成×年9月×日

その日の参加者は8名であった。参加者の子どもは、幼児期から中学生までであった。その中には、発達障害の診断を受けて間もない子どもを育てる母親も参加していた。メンターとしての自己紹介では、知的障害のある自閉症の子どもを育てていること、きょうだいとして兄がいること、自分の活動について伝えられた。そして、「お話を聴くことしかできないけど、なんでもいいので気になることなど気軽に聴いてください」と伝えられた。司会進行を担っていた筆者から、参加者に自己紹介と話したいことを促した。参加者それぞれが、日常の子育てを通して困っていることについて思いを吐き出していた。

<エピソード③>

参加者の中で、幼いきょうだい2人を育てる母親から、障害のある本人に対してきょうだいがどう思っているのか、どうやって障害のことを伝えたらよいか迷っているという相談が投げかけられた。Bさんは、自分の経験から、きょうだいと本人の子育ての思い、愛情のそそぎ方を話していた。私は、その話を聴きながら、Bさんの子どもがまだ幼かった頃、きょうだいげんかや、兄の友人の弟（障害のある本人）への理解、きょうだい児が思春期にさしかかった頃、きょうだい児への対応に追われ、悩み、苦しんでいたBさんの姿を想起した。Bさんの話を聴きながら、Bさんがいつも向き合ってきたこと、本人にもきょうだい児にも同様の愛情を注ぎながら、ここまで育ててこられたことに、労いの気持ちで胸がいっぱいになった。そして、今、ここで、その経験を、悩んでいる人に伝えているBさんを誇らしいまなざしで見つめた。Bさんが、ここで同じような経験をしているクライアントに自分の過去を重ねながら、語っていることの意義を考えた。

<エピソード④>

他のクライアントから「診断を受けた後に、わが子の障害の状態を受け入れられずにいたけど、未だに受け容れられない気持ちでいるけどダメですか？」と投げかけられた。Bさんは「本当によくわかります。だって私もそうだから。朝起きて、この子が健常児になっている夢を未だに見るんですよ。

こんなに大きくなって、毎日葛藤しています。一緒にです。」と答えた。クライアントは身を乗り出して聴き、目を潤ませた。そして、「そうなんですか」と少し驚いたような顔をした。Bさんは「毎日が戦争だけど、まあこれが我が家かなと途中あきらめたけど」と笑った。その笑顔を見た相談者は、一緒に笑っていた。周りの参加者も一緒になって笑顔になった。グループカウンセリングではよくこういう場面がある。苦悩や葛藤を話していても、笑顔の交換が生まれる。それはピアな関係でないと思えない笑顔であると思えた。Bさんの「あきらめた」という言葉は、本当の「あきらめ」ではなく、日々頑張ってきた子育てを通して、大変さや苦しさを乗り越えていく時の知恵や考え方を自然と身に付け、その方法を、優しくユーモアを持って、クライアントに伝えているのではないかと考えた。

<活動後のBさんの語りから>

Bさんは、診断を受けて間もない母親からの言葉を聞くとき、自分自身の過去の苦しかった気持ちを思いだすと語った。それでも、メンターとして活動を続けていく理由について尋ねると、「自分が診断の頃、とてもつらくて、孤独を抱えていた。その時、このような取り組みがあれば、きっと救われていたと思うから」と答えた。また「子どもの年齢があがるにつれ、自分も年をとっていく。子どもが18歳で、診断が3歳だから、自閉症の子どものお母さんになって15年、こんなにお母さんをやっていたら少しは成長していなければね」と笑顔で語られた。メンターの活動に対して「メンターは私にとって生活の一部。活動にかかわらせてもらってすごく誇りに思っている。」と語る。

私は、Bさんと12年間、共に活動してきた者として、改めて、Bさんの子育ての足跡をふりかえった。いつでもBさんは、悩みに向き合い、解決するための方法を、仲間や支援者と共有しながら、歩んでこられた人であった。出会うことができたことを感謝し、また、Bさんのような思いを持っている人に出会う事ができるように、Bさんと共に活動を続けていきたいと考えた。

IV 考察

1 ペアレントメンターにとっての活動の意義とその支援のあり方

AさんもBさんも、メンターとして活動している際には、その役割を果たそうと相談者の立場になり、傾聴をしながら、自分の経験を語られていた姿があった。その様子から、子育ての歩みをとおして、彼女らは成長しているということを実感することが

できた。そして、同じような境遇の母親らの前で、メンターとして、その母親らの思いや願いにひとつひとつに耳を傾け、その言葉の重みを感じるような深いうなずきや相槌は、相談者に安心感を与えていた。その姿は、自分のたどってきた経験や過去に重ね合わせているようにも見えた。

同じ仲間としての共感の姿勢は、クライアントの心を溶き、マイナスな感情を発信し、感情をありのままに出せることに繋がったのではないかと考えた。著者は、その場に身を置き、母親らの双方向のやりとりから、「支援者—相談者」という関係ではなく、限りなく対等である関係を見出すことができた。このような関係の中に、大切な支援の要素が含まれているのではないかと考えた。つまり、メンターにしかできない支援のカタチである。参加者（クライアント）にとっては、メンターの存在は、少し先を歩いている先輩である。その先輩に対する信頼は想像以上にすぐに形成され、時間はそう要しないように思えた。分かり合えるということは、これほどまでに力を与えられるものか、と強く感じる事ができた。

筆者は、この場に存在する支援者としての役割を果たせただろうか。筆者の役割は、このような場（環境）を設定し、参加者とメンターが心地よく語り合える空間をサポートすること大切だろう。そして、この場で出会えた人々（クライアント、ペアレントメンター）の声に耳を傾け、その言葉の意味や重みを省察という作業を通してふりかえることであろう。また、メンターの活動のふりかえりを行う時間を設け、メンターの語りに耳を傾けることが重要である。メンターの声に耳を傾け、コメントを行ったり、労ったり、励ましたりすることだ。活動が、メンターにとって意味のあるものになるための支援を行うことが必要であると考えた。

次に、メンターにとって、活動はどういう意味をもたらすか考えてみよう。エピソードにもあったように、まず、自らの子育てをふりかえる機会が与えられていることがあげられる。参加者に自分の経験を伝えることを通して、過去の自分に出会いながら、がんばっていた自分を肯定することができるのではないかと考える。メンターの活動を通して、経験を語る事、子育てのふりかえりができることで、自己の成長を確認する機会を与えられることになるのではないだろうか。

さらに、活動を通して出会いが生まれる。このような出会いから子育てコミュニティが生まれるのではないだろうか。社会貢献活動は、母親の存在を発揮ことができ、自己肯定感や社会的有能感を醸成できると考える。

支援者は、活動するメンターひとりひとりにとっ

て意味のある活動になるようよう支援体制を整備するとともに、よりよく生きようとする〈母親〉に向き合い、その母親の生涯発達を支えていく役割も担わなければならないだろう。メンターの活動が、その人の成長発達に影響を与え、発達障害の子どもと共に生きる親としての人生そのものに何らかの影響を与え、ひいては、子どもの成長発達にも良い影響を与えていくことになるだろう。

2. メンターと共に創る子育てコミュニティの創造

共生社会における子育てコミュニティを構築するためには、当事者の代弁者となる母親らの存在が必要不可欠であると考えられる。その母親らの存在は、インクルーシブな視点を包含した子育てコミュニティの創造を可能にする。

このような子育てコミュニティを創造するための、専門家の役割を整理しておきたい。まず、1つめに、「人材の発掘」である。支援を通して出会う母親への継続的支援から、母親の社会参画を促す機会があると考えられる。紹介したAさんやBさんのような生き方をしている人は多く存在すると思われる。家族は当事者として、支援される側にとどまるのではなく、「社会に主体的にかかわる存在」として、その力を発揮できるように導くことが望まれる。2つめは、「メンターへの継続的サポート」である。メンターの力を最大限に発揮させるためには、家族支援プログラムの開発・普及を通して、子育てコミュニティの場を創っていくことが求められる。支援者はメンターと共に実践しながら、実践の評価を行っていくことが必要になる。3つめは、「メンター同士の関係を構築すること」である。メンター同士の出会いと学び合いの関係づくりをサポートし、子育てコミュニティを創造していくことである。発達障害児を育てる家族が孤立せず、仲間や専門家、社会にかかわり、つながりの中で子育てを行っていく社会の構築を目指すことができるだろう。

このような仕掛けは、クライアントだった母親が、いつしか誰かを支える人となり、子育てコミュニティに貢献できる人を育てていくと考える。そのような支え合いの場は、共生社会の実現に必要な仕組みではないだろうか。そしてそれを創っていくのは、親と共に活動を行う私たちの専門家の役割ではないだろうか。

V 今後の課題

本邦の発達障害支援体制整備における対策はすでに講じられており、ペアレントメンターの活躍も今後ますます拡大していくことだろう。本稿は、ペアレントメンターの活用ではなく、ペアレントメンターにとって意義のあるシステムになるために家族

と共に創る子育てコミュニティの考え方を提案した。今後も山口県取組にかかわりながら、本研究テーマを継続・発展させるためにペアレントメンター養成にかかわる実践や研究を行っていきたい。

謝辞

本研究は、平成28年度山口県立大学研究創作活動(COC地(知)の拠点型)「山口県発達障害支援システムにおけるペアレントメンターの普及のための研究—効果的な研修プログラム及びガイドラインの作成—」(研究代表者:藤田久美)にて実施した研究の一部として報告しました。

山口県ペアレントメンター養成事業にかかわらせていただいたご縁により、山口県健康福祉部障害支援課の担当職員、山口県発達障害者支援センターまっぶの相談員と共に、山口県の発達障害支援及び家族支援の充実・発展に向けて議論を重ねることができました。また、山口県ペアレントメンターとして活動して下さるご家族とその家族を支える児童発達支援センター等の関係機関の皆様と、活動や研修を通して学び合うことができたことに深く感謝いたします。

文献

- 臨床発達心理士認定運営機構日本臨床発達心理士会.
21の実践から学ぶ臨床発達心理学の実践研究ハンドブック. 2010年
- 鯨岡峻. エピソード記述入門—実践と質的研究のために—. 東京大学出版. 2005年
- 井上雅彦, 吉川徹, 日詰正文, 加藤香. ペアレントメンター入門講座, 発達障害の子どもをもつ親が行う親支援. 学苑社. 2011年
- 井上雅彦・吉川徹・日詰正文, 加藤香. 親と地域でつながる支援, ペアレントメンター活動ハンドブック. 学苑社2014年
- 井上雅彦・小倉正義・原口英之, 加藤香. ペアレントメンターの応用研修および全国調査報告書. 特定非営利活動法人日本ペアレント・メンター研究会, 2015年
- アンパーマー, 服巻智子, 江口寧子. 自閉症の子どもを持つ親のためのペアレントメンター・ハンドブック. ASDヴィレッジ出版. 2009年
- 藤田久美. 地域を基盤とした発達障害児の母親支援システム構築の過程と課題～インフォーマルサービスの開拓における専門家の役割に焦点を当てて～. 臨床発達心理実践研究, 第6巻. 2011年. 138-144.
- 藤田久美, 吉富徹, 岡村隆弘. 発達障害早期支援システムにおける家族支援プログラムの検討: 児童発達支援センターへのペアレント・メンター導入

- の試み. 山口県立大学学術情報 9, 2016年. 135-144,
- 藤田久美, 山口県発達障害者支援センター. ペアレント・メンターとともにつくる家族支援ガイドライン. 平成28年度山口県立大学研究創作活動(COC地(知)の拠点型)報告書, 2017年
- 柘植 雅義・井上雅彦. (2007). 発達障害の子を育てる家族への支援. 東京. 金子書房.
- 中田洋二郎. (2009). 発達障害と家族支援～家族にとって障害とは何か. 東京: 学研
- 藤田久美(2007). 幼児期における自閉症児の母親支援に関する研究. 平成16年度山口県自閉症・発達障害者支援センター母親支援事業報告書. 山口, 山口県自閉症・発達障害者支援センター(現: 山口県発達障害者センターまっぷ).